

八木重吉全集

第二卷

八木重吉全集

第二卷

詩集 貧しき信徒・詩稿Ⅱ 他

筑摩書房

八木重吉全集第二卷

昭和五十七年十月二十六日初版第一刷發行
昭和五十八年二月十月初版第三刷發行

著 者 八 木 重 吉

發行者 布川角左衛門

發 行 所

東京都千代田區神田小川町二ノ八
筑 摩 書 房

郵便番號 一〇一—一九一

電話 東京(〇)七六五一(代表)

振替 東京 六一四一二三

印刷 明和印刷株式會社
製本 鈴木製本株式會社

落丁・亂丁本はお取替致します

目次

詩集 貧しき信徒

序（加藤武雄）	五	ある日	三
母の瞳	七	憎しみ	四
お月見	七	夜	四
花がふつてくると思ふ	八	日が沈む	四
涙	八	果物	五
秋	八	壁	五
光	九	赤い寝衣	六
母をおもふ	九	奇蹟	六
風が鳴る	一〇	私	七
こどもが病む	一〇	花	八
ひびいてゆかう	一一	冬	八
美しくすてる	一一	不思議	八
美しくみる	一二	人形	九
路	一二	美しくあるく	九
かなかな	一二	悲しみ	一〇
山吹	一三	草をむしる	一〇
		童	一二

春	春	春	石	太	病	冬	梅	春	陽	春	春	春	水	萩	あ	蟲	大	蟻	雨
.....																			
.....																			
.....																			
三〇	元	元	六	六	六	七	七	六	六	五	五	四	四	四	三	三	三	三	三

霧	響	素	お	踊	木	ひ	桐	障	く	雨	日	冬	霜	夕	森	冬	冬	神	櫻
.....																			
.....																			
.....																			
元	六	七	七	六	六	五	五	四	四	四	三	三	三	三	三	三	三	三〇	三〇

故郷	元
こども	元
豚	〇
犬	〇
柿の葉	二
涙	二
雲	三
お 錢 あき	三
水や草は いい方方である	三
天	三
秋のひかり	四
月	四
かなしみ	五
ふるさとの川	五
ふるさとの山	五
顔	六
夕 焼	六
冬の夜	六
麗 日	七
冬	七

冬の野	六
病床無題	六
無 題	六
無 題	六
無 題	六
梅	六
雨	六
木 枯	五
無 題	五
無 題	五
無 題	五

生前発表詩（詩集末収録）

いきどほり.....壺
 かけす.....壺
 路.....癸
 丘.....癸
 椿.....毛
 心.....毛
 筍.....瓦
 春.....瓦
 顔.....瓦
 絶望.....宍
 雲.....宍
 断章.....二
 春.....二
 原つば.....三
 松林.....三
 栗.....三
 よい日.....四

山.....四
 竹を切る.....壺
 とんぼ.....壺
 冬.....癸
 朝.....癸
 冬.....癸
 冬.....癸
 冬.....癸
 冬.....癸
 冬.....癸
 暗い心.....宍
 無題.....宍

詩稿Ⅱ

詩稿 桐の疏林

○へじつはたれにもあひたくは…
 ○この聖書のことばを…
 ○うそのことばだ…
 ○ときと／ところと…
 ○まばらなる／桐のはやしの…
 断章へあたらしき／たましひを…
 ○わたしが／詩をすてるとき…
 ○ひとつの／まよへるたましひ…
 ○かなしみの／わきいづるうちは…
 ○云わない…
 ○ながい日かず／死をおもへば…
 ○これもだめだ…
 ○花をみようといふ…
 ○すこしばかり／金をくれ…
 ○あのひとに…
 断章へかたんなことは…
 ○死をよごごと…

○ゆめきえたるがゆえに…
 ○むしろに／うたを…
 ○むさむさと／なつみかんを…
 ○いろいろの／感覚は…
 ○みづからが／ひとをみる…
 ○わたしの詩よ…
 ○いつわりに行くくるしき…
 イエスは きつとまたくる
 ○このかなしみを…
 ○しんじつをかたらざる…
 ○やすらかな／死がまつてある…
 ○みんなわるいだらうよ…
 ○よろよろと／よろめいてゆく…
 ○み名をよぶ／こころ衰ふれば…
 ○しばらく／ちんもくの…
 ○つひに／ひらくべからずと…
 ○てんごくを／ゆめにみたいなあ…
 ○まつばやしの／ふもとが…
 もったいない
 ○桐ばやしは…

豚
 ○ほんの／かすかにではあるが…
 雲へいばんいい…
 ○かんがへてみると…
 いきどほりを…
 ○ふみならし…
 詩稿 赤つちの土手
 ○あかつちの／くづれた土手を…
 ○おほきな／沼をみた…
 ○あらゆる／こころの像よ、去れ…
 ○しどめの花は…
 ○うたは／絵よりもうれしい…
 ○ひにくなこころと…
 妻妻がいそいと…
 ○すべて／ものすえはいい…
 ○机のうへ八重つばきが…
 どさん、どっさん、といふ心臓
 竹林へ竹のはやしへきて…

○「かなしい日と／ものうい日は」
 五
 ほほえみとなれ
 五
 ○「すこし／したばらのいたむ」
 六
 かすかなもの
 六
 ○「しようにとなしに」
 六
 ○「ほんとうをいへば」
 六
 早春小景
 七
 ○「ちつてゆくのをみたら」
 七
 ○「もうすこしで／こぼれそうな」
 七
 ○「妻よ／あなたの幸福のみちは」
 七
 ○「妻よ／さひわひをもとむるなら」
 七
 ○「妻よ／わらひこけてゐる日でも」
 六
 ひとを怒る日
 六
 ○「なにゆえぞ／わがころに」
 六
 ○「『ほくは／天文学者になる』」
 六
 ○「どこまでも／つつく」
 六
 ○「ちからかぎり」
 六
 ○「うつくしく／生きたいものだ」
 六
 ○「むかし／海をこがれた日は」
 六
 けやき／けやきはいい
 六
 ○「つかまへどころもなく」
 六
 ○「松のはやしと」
 六
 ○「いい丘だ」
 六

○「雑木ばやしがある」
 六
 悲し み／かなしみは」
 六
 ○「丘のうへの／はたけへきて」
 六
 ○「むぎばたけが」
 六
 ほそい松
 六

春のみづ

○「きりすと／われにのみがえれば」
 六
 ○「死のうかとおもふ」
 六
 筍（たけのこ）
 六
 ○「か ら／か ら か ら」
 六
 ○「四つに／わかれたみちは」
 六
 ○「かなしみを／しきものにして」
 六
 ○「せつぼうのうへにすわって」
 六
 ○「あつさと／うまく」
 六

詩稿 赤いしどめ

松とつばね
 六
 路はるの／ゆふぐれのみちは」
 六
 ○「はばかりへはいったら」
 六
 こんがすりの子ども
 六

雲のような児
 六
 ○「はるの／ゆふぐれ」
 六
 ○「はるの／ゆふぐれには」
 六
 水／たとへば／水のことを」
 六
 しどめ「初稿」
 六
 ○「じさいに／詩がつくれてきたら」
 六
 ○「あさ／やまぶきをみれば」
 六
 ○「なんと／いつたらいだらう」
 六
 ○「むぎのなかに／うちがあつた」
 六
 なけそうだ
 六
 なきたいな
 六
 ひどく うつくしい夕べ
 六
 なきたくなつた
 六
 つゆが おりてゐる
 六
 柿の 木
 六
 ○「いちんち／いちんちと」
 六
 雲／くもにも」
 六
 ○「（こども）／丘があつて」
 六
 ○「あかんばんをおんぶして」
 六
 ○「ゆふぐれの／はらっぱへ」
 六
 ○「いいゆうやけだといふから」
 六
 ○「お月さんは」
 六
 こんな日は
 六

詩稿 ことば

○まつの木のはやしをみると	二〇	○ゆふぐれの陽のなかを	二〇	松 林〈まつのはやしへ…〉	二三
○しろいそらへ	二〇	○死をおもひ／死をおもひて	二〇	桐の花をおもへ	二三
○まつの／しん林へはいると	二〇	○涙〈めをつぶれば〉	二〇	○ちいさい／むしの羽おとなのか	二三
まつのたんご	二〇	○雲〈あの 雲は くも〉	二〇	○きりの／あさは	二三
○かやの／ひろをい…	二〇	○水や草は いい方方である	二〇	原 っ ば〈蛇なんか	二三
		○とがす力だ	二〇	○ちいさい野よ	二三
		○お 銭 ^{あし} 〔初稿〕	二〇	○ないたとてだめだ	二四
		お 銭 ^{あし} 〔第二稿〕	二〇	○ああちゃん！	二四
○うつくしいことばかりわかつて	二四	○その日がきたら	二〇	わたしのおしやべり	二四
わらへる日	二四	松へつゆに はいる目	二〇	あかんぼもよびな	二四
○すこし死ねば	二四	○わたしは／死をいつももつ	二〇	松 林〈ほそい／松が…〉	二五
○ひとつの／ひかりを…	二四		二〇	○ずあぶん／ひろい のはらだ	二五
ゆるしたい	二五	金 魚	二〇	○すこし／ゆふぐれ	二五
○人のきもちがわかりすぎる	二五	断 章〈天に／神さまが…〉	二〇	すいすいとした 松の矮林	二六
○わたしは／キリストをしんずる	二五	梅へひとつの気持をもつていて	二〇	ゆふ 陽〈もうすこし／心を…〉	二六
○柿の葉〈柿の葉はうれしい	二五	麦〈麦は しげつてきた	二〇	○もくもくしたはるの日だ	二六
○桃子は／おちいたば…	二五	水〈はるの水は	二〇	○斜面といふものは	二六
○さがしたつてないんだ	二六	牧 場	二二	○ななめの地面は	二七
もちやもちやの犬	二六	いってしまいたい	二二	断 章〈ふとかがへると	二七
信 仰人が何と言つても…	二六	○たかく／生きたい	二二	○山にもあき	二七
断 章〈もえなければ	二七	断 章〈また／なんにもかも	二二	松 やま	二七
竹 林〈竹のはやしには	二七	原 っ ば〈みどり／ばっかりの	二三	松 風〈まつかぜは	二七
子供的眼	二七	野にくれば	二三	○あさ／つゆをみると	二八
		天といふもの	二三		

○まつ／＼はやしへはいりこんで 二八
 ○川はいい 二八
 ○野にゆけば／＼ころはおどる 二八
 ○おもふこと／＼世にいられぬ 二九
 ○詩さへもはかない 二九
 ○ああいへば／＼あそこたへ 二九
 ○あまりに／＼人のころが 二九

○へん刻で／＼みにくいよりは 三三
 へびがこわい 三三
 くりくり頭 三三
 ○徳は／＼なほ毛のことしといふ 三三
 ○つゆぐもりの日 三三

○へわたしは／＼あなたと 三七
 ○へちんもくを／＼つらぬいてみよう 三七
 ○へだまってゆけ 三六
 ○へからしい世の中よ 三六
 ○柿の木のしたの 三六
 ○麦のうれるころは 三六
 麦が熟れる日 三六
 断章へひとをいかり 三六
 断章へくるしくなつて 三六
 断章へろふはやすい 三六
 ○へ死ぬこともできない 三六
 断章へこの水をのむとく 三六
 ○へわたしのおもふところ 三六
 断章へかなしくなると 三六
 断章へ死ぬることく 三六
 断章へひとをゆるし得ない 三六
 断章へ秋をおもふころよ 三六

詩稿 松かぜ

花 火へむく と／＼けむりが 三〇
 断章 井戸をのぞくなよ 三〇
 六 月 三〇
 松 かぜ松かぜをきいて 三〇
 ○へふとい幹へ 三〇
 ○へかみさまは／＼せかいちゆうの 三〇
 蜻 蛉 原つばの／＼まんなかに 三〇
 白 花 びら 三〇
 と ン ぽ 三〇
 風 むぎの穂づらを 三〇
 ○へそれならば 三〇
 断章へあめつちにいれがたき 三三
 断章へいいものを 三三

断章 鉄がとけるように 三四
 桐へ花のさいた桐と 三四
 断章へのみを一匹 三五
 断章へできることなら 三五
 ○へへないおもひが 三五
 断章へいつの日に 三五
 雲へいい雲があれば 三五
 ふるさとへふるさとおもへど 三六
 ○へ芭蕉のようになるな 三六
 ○へ死ぬるか／＼ゆるせるか 三六
 断章へかすかに 三六
 ○へみにくいものは 三六
 ○へうつくしいものはかすかだ 三六
 ○へ凡人でありながら 三七
 ○へにくしみといふものが 三七

詩稿 美しき世界

童 こと 三三
 いきどほりへさつと／＼いきどほりは 三三
 かげつてゆく 三三
 ある時へいつのじぶんからか 三三

うつ木	三三				
歩るきたくなる	三三				
ひとりぼっち	三三				
よい心	三三				
〇へいつになつたら	三三				
雲もくもくと	三三				
茅を刈る	三三				
水蜜桃	三三				
不思議	三三				
こどもが歩く	三四				
ねがひへほんとに／よい人に…	三四				
蟻	三四				
くもり日	三四				
(山吹)	三四				
野にすむ	三五				
〇へいきどほりながらも	三五				
〇へころがゆく	三五				
ある日へいくらなんでも	三五				
悲しみへ人をいきどほる	三五				
〇真夏の空にたかくみる	三六				
星よく／人が星はうつくしいと…	三六				
怒りへいきどほりと	三六				
ある日へいちにちくるしんだ…	三六				
ねがひへこそ／断ち切つても	三七				
断章へそだけ／かるくなり	三七				
螢	三七				
〇こどもの／かんがへを…	三七				
〇力をしり	三七				
〇うつくしくなつたら	三八				
〇みいんな／仲よくくらそう	三八				
(美しくすてる)	三八				
(憎しみ)	三八				
悲しみへかなしみと／わたしと	三八				
草をむしる	三八				
〇もったいない	三八				
(かなかな)	三九				
〇へかなかなが鳴く	三九				
(ある日)へころ／うつくしき…	四〇				
〇むなしく／命うごく	四〇				
〇かなしかれど	四〇				
詩 ● うたを歌わう					
憶えがき	四一				
百日紅	四二				
蟲へ蟲がないてる	四二				
蟬	四三				
あさがほ	四三				
雨へ雨が ぼしやぼしやふつてる	四三				
雨の日(うたを歌わう)	四三				
水瓜を喰わう	四三				
茄子もくわう	四三				
お湯へはいらう	四三				
菓子をくれないか	四三				
ひちりき	四三				
いいことをしよう	四三				
ある日(雨はやんだ)	四四				
せんべい	四四				
桐の木	四四				
笛をふかないか	四四				
あかんぼが哭いてるよ	四四				
なかよくしよう	四五				
はなしをしよう	四五				
あるときある時／するするっと	四五				
こうちん蟲	四五				
鞠をつくのか	四六				
泣こうかな	四六				
雨へ雨がふる	四六				
お茶の木	四六				

蟲を殺そう
萩はすきか

一四
一五

詩 ● ひびいてゆこう

こどもこどもが ふたり
ある夜
秋がくる日
ねがひへ人と人のあひだを
愛ふつくしいところがある
愛のことは
愛の家
花がふつてくるとおもふ
雲くもはうかんでゐる
秋の朝
もも子がおどる
足をなめる
あさがほが さいてた
ひるがほ
大山とんぼ
ある日へこれでは
ねがひへじんから
ひびいてゆこう

一四
一五
一六
一七
一八
一九
二〇
二一
二二
二三
二四
二五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三四
三五
三六
三七
三八
三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇

とんぼへゆふぐれ／おか稲は…
へへのものへじ
うつむいて歩るく

詩 ● 花をかついで歌をうたわう

秋／秋／こころがたかふつてくると
光へひかりと あそびたい
雨／雨をみてる
はつあきの野
うつくしき わたし
ひかりへひかりを呼ぼう
死へ死をおもわぬときは
こどもが病む
雲へつまらないから…
雲／雲が／うごいたので
ばった
空へ空よ／おまへのうつくしさを
花とあそぶ
花にこにこ／遊びたくなつた
秋／秋になつて
夜へ夜になると／ひとりで…
松葉

母をおもふ
手へ電気が消えた
ふさげようか
松ばやしへ松ばやしのなかに…
涙へつまらないから
ちさい流れ
月へ月に照らされると／ひとりでに
月遊びたくなつてくる
月へ月に照らされると／うたを歌ひ
秋のひかり
山へきもちのいい日だ
心よ
風が鳴る
もえよう
あるときへくるしいとはいわぬ
雨がふる
ある時へつに／することも…
あそび
お月見
太陽へ太陽をひとつ…
光へひかりに うたれて

ゆふぐれの松林

夕陽

母の瞳

影

秋の空

ふるさとの川

ふるさとの山

秋のこころ

雨〈雨のおとがきこえる〉

星〈星は／ひとみをひらき〉

花〈たまらなくなつてくると〉

秋に入る日〈断片〉

妻に与ふ

桃子よ

陽二よ

初秋

はつ秋の夢

赤とんぼ

天の川

歌

かなしみへかなしみを乳房のように
まさぐり

詩 ● 木とものの音

木とものの音

雨〈雨がふつてゐる〉

ブレークに寄す

小石

死〈お互ひにうでをくみ〉

狂へる秋

雲〈あかるい空に〉

秋〈秋になると〉

薪をくべよ

栗〈くり／くり〉

人形

富士

ハヤ

けやき〈けやきを おもへば〉

天国〈春になり〉

秋〈ひとり静かにものおもひたい〉

雨〈雨は／庭のみづたまりに…〉

貧者

不死鳥

秋〈力がめぐつてくるのだ〉

すすき〈すすきは白くひかり〉

あるとき〈愛し切れぬなら〉

栗〈栗をたべたい〉

おもひ

詩 ● よい日

〈このころは詩か手紙のほかは…〉

桃子つかれて帰へつて…

蟲〈くもり日に／くさむらの蟲が…〉

桃の花

切ること

日くれ〈日がくれると〉

榎の木

けむり〈ころがとざして…〉

瞳

わが歌

もや

稲

よい日〈あかるい日／よい日〉

土蜂

心の瞳

夜〈よる／つまらないから〉

こほろぎ	二七	竹の皮	一八	ねがひへのを欲しいころ…	一六
あるときへつまらないから	二七	桜へふるさとの／さくらの　ゆめよ	一八	本当のもの	一七
花へゆふぐれ／花をもつて…	二七	銀杏	一八	キリストへキリストは…	一七
川へ落ちた栗	二七			太鼓	一七
持つこと	二七			ひとりごと	一七
こたつへいくでも…	二七	詩●　しづかな朝		かしらを垂れ	一七
柿の葉赤くいろづいた…	二七	涙へ涙はながれるけれど	一八	秋へ草をふみしだいてゆくと	一八
ふるさとへふるさとは瞳をひらき	二七	ねがひへ血あり涙あるひとに…	一八	ねがひへできるだけ…	一八
霧へ霧はふつてるのかぬないのか…	二七	母	一八	ねがひへ… いけな	一八
夜の霧	二七	日へ日が　かがやいてゐる	一八	死へ死をあざやかにおもへる日は	一八
昔　嘶	二七	松　風へ松かぜがきこえる	一八	悲しみへ悲しいものがやぶれ	一八
さるすべり	二七	花へ松ばやしのかなかへはいつたら	一八	母の　顔へ月にてらされて…	一八
孝心	二七	水たまり	一八	ひとつの姿	一八
はにかみ	二七	秋の水	一八	栗へあかるい日／栗の木をみて…	一八
柿	二七	川	一八	松へ松はさびしかろう	一八
提　灯	二七	山へあかるい日／山をみてゐると	一八	雨へ雨は土をうるはしてゆく	一八
まぼろし	二七	ひかる人	一八	水たまり	一八
祭の追憶	二七	考がひかる	一八	夜の　雨へくらいよる	一八
幼きさびしさ	二七	雨の音	一八	おしろい花	一八
とうもろこし	二七	森へ森はひとつのしづけさをもつ	一八	秋へまらないから	一八
椎の実	二七	雨へ雨がふつてゐる	一八	しづかな　朝	一八
あかつき	二七	ゆるし	一八	さびしい日	一八
落　葉	二七	煙へ小雨がふつたりはれたりする	一八	森のかげへ森のひかげの	一八

日をゆびさしたい

日をゆびさしたい

夕 焼へゆう焼をあびへ

かへり路

うす陽

コスモスへうす日のなかに

菊へうすら陽のなかに

菊へ菊の芽をつみながら

雨へ窓をあけて雨をみてゐると

影

障 子

こすもすへおだやかなきもちで

痛める心

暗い心

くろずんだ木

日が沈む

十字 架へわたしもまた

あかるい日

夜へ夜になると／からだも…

おだやかな心

土 手へあかるい土手にもたれて

初 霜

秋のかげ

雨へこうもり傘にあたる…

風へ雨にまじって

にぎり水

専 念

小 鳥へ朝の窓のそばにゐたらば

夢へくつたりとおもひ疲れたので

夢へ小さい夢をてのひらへもって

母を呼ぶ

むなししい心へうすら日が…

土 手へあかるい土手にもたれて

空へ空をみて

朝へ朝はしつとりとぬれてゐる

雨 の 日 「自選詩集」

詩 ● 赤い寝衣

霧へ霧がみなぎってゐる

壁

木へはつきりと／もう秋だなと…

○すぼらな気持をすてよう

いたずら描き

色づいてゆく秋

果 物

夜は夜はものの力がしづまってくる

赤い寝衣

静かな心へうつくしく…

雨へかんがへくたびれて

白い花

雨へじつと眼をつぶって

炭 火へ炭火をおこすのは…

雨へ軽くものをはなしたきもちで

ある 時へなんにも要らない…

静かな心へてのひらに玉をもち

裸 身

雲へあして／また雲は…

味 わ ひ

朝へこうして／窓のところで…

寝 顔へ家のものどもは

炭 火炭火をみつめて

秋へ秋になると

ささやかな生活者

山へあかるい日